

日本教育心理学会第12回総会

部門別研究発表題目・討論の概要

100 理 論

200 認知と学習

300 学習指導と能力測定

400 人間形成と人格測定

500 社会性と人間関係

600 発達障害と適応障害

論文番号は「日本教育心理学会第12回総会発表論文集」と対応している。内容の詳細については、同論文集を参照されたい。なお番号は3位数は部門、2位数は室番、1位数は発表順、3ケタで論文番号を示す。○印は口頭発表者。

100 理 論 (111~6)

座長 恩 田 彰
上 田 吉 一

- 111 機能的発達連関研究の方法の検討
西 川 和 夫 (京 都 大 学)
- 112 高次精神機能の発達法則について
筒 井 健 雄 (信 州 大 学)
- 113 西洋と東洋の発想法を中心とした
創造性の比較研究
恩 田 彰 (東 洋 大 学)
- 114 (発表取消し)
- 115 カウンセリングの目標に関する研究 (7)
—Maslow, A.H. の人格論について—
上 田 吉 一 (姫路工業大学)
- 116 学習指導上の問題点
安 田 春 弥 (鳥 取 大 学)

I 全 体 的 特 徴

理論部門は、① 精神機能に関する発達心理学的基礎理論に関するもの、② 創造性、健康性に関するもの、③ 学習指導批判に関するものに大別できるであろう。

① に属する研究としては、その形式的側面を捉えた西川の研究と、その内容面から考察する筒井の研究がある。

西川は、精神機能の発達過程を観察すると、その各時期において種々の特徴的な行動能が認められる。そこで

この行動能間の機能的連関性を追求することにより、それらが相互に等質で、かつ他の期間のそれとは異質であることが明確にされれば、この等質性の期間が発達段階を構成することを論じている。

これに対し、筒井の研究は、ヴィゴツキーの高次精神機能論を基礎に、「精神的機能」「高次精神機能の内面化の法則」「高次精神機能の発達の主体的法則」について順次論じている。特に「内面化の法則」では親子関係のありかたについて、「発達の主体的法則」では精神成長の様相について発達の具体相が説明され、示唆的である。

② に属する研究には、創造性の問題をとりあげた恩田の研究と、精神の健康性の問題を論じた上田の研究がある。

恩田は、創造性の思想が洋の東西にしたがって異なった形をとることを主張し、創造説と縁起説、論理的思考と直観的思考、理性と感情、自己分析と真実の自己発見、思索と瞑想というように対比的に捉えている。そして結論として、今後の創造性のありかたは、論理的思考を中心に、新しいイメージ作りに重点をおく西洋の発想法と、直観的思考の開発に重点をおき、真実の発見をめざす東洋のそれとの統合に向けられるべきことを論じている。

上田の研究は、カウンセリングの目標とする健康な人格のありかたを、マスロウの自己実現の心理学、ことに彼の名著「動機と人格」から捉えようとするものであ

る。上田はここでマズローの人格理論を考察した結果、彼の精神的健康に関する記述がカウンセリングの目標としての人間像設定に、また同じく欲求の階層論がカウンセリングの方法論に果たす役割を強調している。

③に属する安田の研究は、小・中学校における学習指導が、知能・学習速度における個人差や環境・性格の差異を無視し、また学習者の主体性を奪った画一的教科書や指導計画を押しつけ、さらに不必要に集団学習を行なっていることを指摘し、これを批判している。そして改良されるべき点を各項目についてあげている。

なお、赤松は、マクドゥガルの性格の概念について発表する予定で、すでに論文集にも掲載されていたが、突如として故人となられた。謹んで冥福を祈りたい。

II 討 論 の 内 容

安田：恩田のいう縁起説と因果律とは、どう違うのか。恩田：この場合両者の類似性をとりあげたが、その違いについては十分検討していない。あえていうならば、因果律は科学の思想から出ているが、縁起説は宗教思想の地盤から出ており、厳密に論理的に究明されているものではないと思う。木村禎司（日本大学）は、縁起説は変化という点に重点をおいている。キリスト教では、神だけが創造できるのだという。これに対して進化論が出たが、これは一元論である。筒井：以前は有機物と生命体とに境があると考えられていたが、オパーリンの「生命の起源」などにより、その境がくずされてきた。また縁起説は、日本では因縁とかいって暗い印象を与えている。

安田：精神は物質の反映であるという見方があるがどうか。筒井：人間の心を刺激→受容器→中枢→効果器→反応というように分析できるが、それだけでは十分に説明できない。人間はある存在の要素として働く機能からとらえることができる。木村：機能と要素とは別のものだと思う。筒井：存在は静的に見る見方と、動的にとらえる見方もある。木村：発達の中心（核）となるものは何か。筒井：人間の心では自分という存在であると思う。

上田：西洋と東洋の発想法はなぜちがうのか。それは

風土の違いからくると思う。西洋では自然がきびしく、家は石造りで自然と対立する習慣がある。そこで論理的思考、合理的思考が発達した。これに対し東洋では自然と一体化する傾向があり、そこで考え方が直観的になったと思う。奥田嘉茂（立命館大学）：恩田は東洋の発想法では瞑想を重視するというが、禅僧が全国を修行行脚するのはどういう意義があるか。恩田：禅僧の修行の中心は坐禅であるが、一定の指導者について行なう。しかしある程度修行が進むと、他の指導者について指導を受けるため、または自己の知見をひろめ、かつ深めるため諸国を歩いてまわった。自己を新しい生活状況におくと、新しい考え方が出てくるものである。

恩田：Maslow A.H. はその精神的に健康な人格に関する考え方に禅や老荘の思想の影響を受けているといわれるがどうか。上田：確かに彼は晩年にはそのような東洋の思想の影響を受けていた。

今井欣悦（大阪教育大学）：個性にあった指導は当然であるが、個性とはどういうことか。安田：個性とは生まれついた能力である。今井：それを把握するにはどうしたらよいか。安田：教師が外から物を与えるのが学習指導の中心であるという傾向が現在でも残っている。学習者は子どもであって、教師はそれを援助するのが役割だ。今井：子どもを援助するには、個性を把握しなければならぬと思う。安田：子どもは内部から発展するのだから、外部からとらえなくてもよい。木村：今の個性であるが、人間には欲求不満がある。それを軽減させていくのが学習だ。安田：人間性には可能性がある。しかしどのようにして発現するがわかっていない。上田：それには動機づけがたいせつになると思う。安田：外からの動機づけではなく、内部からもりあがってくる内的動機づけが重要である。

恩田：西川の研究で、発生的な関連があるとする場合、ないとする場合とくらべて時期的な関連が高くなると仮定されるということであるが、それは結局どういうことか。西川：個体が異質に変化することはありえない。多少共通する部分をもって変化する。発生的な共通性があるとする、共通な変動がある。

（恩田 彰・上田吉一）